

2010 年度

## 外交・安保サマーセミナー

### 活動報告書

日時：2010 年 9 月 24 日(金)～26 日(日)

場所：シースケープ伊豆高原（静岡県伊東市八幡野宇ニタ1131-62）

テーマ：「新しい国際秩序を模索する世界と日本」

参加者：講師 14名、学生・社会人：32名、事務局：3名

#### ■セミナーの目的

国際政治や外交・安全保障を真剣に学ぶ学生、国際ビジネスの最前線で活躍するビジネスマン、外交や安全保障の現場第一線で活躍した元外交官や自衛官、この分野の最新動向を研究する学者や研究者たちが、世代を超えて集い、世界と日本について真剣に議論を交わし、日本がどのような外交・安全保障政策をとるべきなのかを具体的に検討し、かつ志を同じくするものたちの横と縦の絆とネットワークを深めよう、というのがこのセミナー開催の目的である。

#### ■報告概要

今回も講師、参加者合わせて 50 名近い参加者が集い、そのレベルや内実は 09 年をはるかに凌ぐ盛り上がりを見せるセミナーとなった。分科会の数を今年は更に増加させ、10から 14 に増加させ、講師の数も増やした。ポリミリを前提としたチームごとの情報収集、戦略策定のグループワーキングの時間も延長した。各自が目的意識を持って講師に質問をし、収集した情報をチームの他のメンバーに伝えて、グループ全体で議論を深めることができるように、プログラムにも更に工夫を加えた。講師の選定も、軍事に偏ることのないよう、研究者やジャーナリストを加え、多彩な顔ぶれとなり、セミナーの色をさらに多彩なものとした。特に、今回は防衛研究所や国会図書館調査部などの政府系シンクタンクからの人間が数多く講師として参加した。

参加者の多彩さも同様で、東京大学、早稲田大学、慶応義塾大学、上智大学、筑波大学、同志社大学、明治大学、立命館大学、名古屋大学、大阪大学、拓殖大学、専修大学、東洋大学、左記の各大学院、共同通信社、陸上自衛隊、海上自衛隊、防衛省・外務省等、スーダン支援 NGO 団体、松下政経塾塾生、石油資源開発株式会社、日本経済新聞系雑誌副編集長等の多様なバックグラウンドを持つ人間が参加者として集った。

また、今回は参加者や講師全員の交流と議論を促進すべく、懇親会や交流所の設置、参加者からの発表による討議の時間を設けた。特に、コモン国際情勢研究会から参加した人間による発表は、イベントの双方向性や盛り上がりとして考えた場合、成功した。これらの措置もあり、参加者は夜を徹して議論を続け、平均睡眠時間は 3 時間と自然になった。

分科会に割り当てられる時間の配分や、全体会の内容やその構成など、まだまだ改善が必要な

点も確認されたが、参加者からの反応はよく、全般的には充実した満足度の高いセミナーとなった。前回参加した中から社会人を含む 7 名のリピーターがきた点も、セミナーの充実度をはかるうえでの目安になったと考えられる。次年度は、学生から社会人になってからもリピーターとして参加してもらえよう、幅広い層や分野の参加者に満足してもらえるような会に、さらに充実度を高めていきたい。

具体的な施策としては、広報活動の充実も掲げたい。

## ■活動記録

9月24日(金)

●09:00～

### 虎ノ門駅前集合、バス移動

今年のサマーセミナーは、分科会、講演、議論の時間を増やすべく、虎ノ門0900集合と、これまでの三年間で一番早い時間に設定した。幸い、遅刻者は一名のみで、予定通り開始した。

バスの中では、吹浦理事長のご挨拶、菅原実行委員長からプログラムの説明があった後、一人一人が自己紹介を行った。まずは講師の先生方、そして参加者の生徒たちが、今回セミナーに参加した理由や現在の関心事などについて簡単に各自紹介をした。

続いて事務局の部谷より、諸注意や最終日のロールプレイ・シミュレーション「ポリミリ」についての説明がなされた。初心者も多い中で「ポリミリ」を成功に導くため、この後も何度となく、その要領や意義について事務局や講師から説明することになる。

●12:00～

### 昼食、開会式

シースケープ到着後、受付時に「私は、第三回外交安保サマーセミナーで得た情報について、その問題に対して見識を深めるため以外の目的に使用しません。各種媒体において論文、記事、BLOG、呟きにすることや引用は決して致しません。情報提供者がその情報について語ったという事実ですら公表しません。この誓約を破った場合、関係各機関に漏洩者について連絡を行うことに対して異議はありません。また、その損害を補償いたします。」との由の誓約書に全員記帳させた。これは会の議論を活発化させ、講師に忌憚のない話を期待するためである。

昼食をとった後、すぐに大会議室に集合し、施設内での注意事項を、事務局の部谷・西山より説明。プログラムの確認と分科会の要領などを説明し、すぐに分科会に分かれた。

●1430～

## 全大会 A

### 日本の課題

講師：吹浦忠正

当イベントの主催である、ユーラシア 21 研究所理事長である吹浦忠正氏を講師として、イベント開始に当たってキックオフ講演を行った。

先ず最初に吹浦講師より、日本の領土問題についてのクイズが行われ、参加者の問題意識を揺さぶり、反省を促した。そして、日本の政治に長年携わってきた、講師の経験談や知見が縦横に披瀝され、参加者の関心を呼んだ。特に、現在の政治における混乱の原因を明快に解説し、講師も含めた参加者のモチベーションを大いに高め、問題意識を涵養した。

学生たちにとっては、なかなか触れることの少ない政治の実相について、極めて刺激のかつ歴史的な深みのある講義を聴く貴重な機会となった。

●1600～

### ◇分科会1－1「中国の安全保障政策入門」講師：飯田将史

中国の安全保障政策を考える上での枠組みは意外と難しい。どうしても、情報が足りない分、最初の分析枠組みの段階である種の独断と偏見が混ざりやすいからだ。しかし、飯田講師の講義は、そうした陥穽にはまることなく、ファクトのみを用いて、見事に中国の安全保障政策の基本枠組みを提示した。これは、講師の冷静かつ緻密な情勢分析のみならず、彼自身の切り口の斬新さに起因すると思われる。

また、先日の中国の軍事パレードの分析についても、歴史的、政治的文脈からの分析を行い、抽象論や瑣末な議論に偏らない、講師の切れ味のある分析を直接拝聴できたのは幸運であった。

### ◇分科会1－2「インテリジェンス入門—国際情勢を分析するには—」講師：菅原出

執筆担当：清水 優

インテリジェンスとは何か？漠然としながらも、その意味を把握していたつもりであったが、今回の菅原出氏の分科会に参加して、インテリジェンスに関する多くの新しい視点を得ることができたと強く感じることもできたと思う。とりわけ、国際情勢を分析する視点を養うためのもっとも有益の方法が歴史研究だということでお話いただいたインテリジェンスヒストリーについては、古いものである歴史から新しいものである現代の国際情勢を有効に分析するエッセンスを学ばせていただくことができた。第二次世界大戦期におけるインテリジェンスヒストリーの部分においては、チャーチルが仕掛けた諜報戦争が、決してダイレクトにハードすぎないが、しかし着実に目的を遂行していくという内容であったことに、かなりの刺激を受けた。チャーチルがなぜプロのスパイである MI6 の諜報員で

はなく、友人のイントレピットらをよく使ったのかにも関心を持った。また、9.11をめぐるインテリジェンスヒストリーを同時に扱うことで、アメリカというインテリジェンス大国がとった戦略が、似通ったものであるという見解は全くその通りであると思ったし、このような発表の形態だからこそ比較対照を容易にすることができたのであろう。このように歴史を深く分析することで、現代の国際情勢の分析にも活用できるということ、実例を基に貴重な研究発表を通じて学べたことは、大いなる経験であった。

「歴史は繰り返す」「秘密工作は必ず負の遺産を残す」

今回の分科会で印象に残ったこの言葉が物語っているように、インテリジェンスの重要性、これを再認識させていただいたこの機会を、小生ながらも安全保障に携わりたいと決意している自分の将来に必ず役立てたいと断言して末尾とさせていただきたい。

### ◇分科会1-3「国際関係を考える～ケース・スタディから学ぶ～」講師：鈴木邦子

執筆担当：山本 堯之

分科会「国際関係を考える」においては、その表題から想像するような「国際関係論」的議論ではなく、むしろ理論から離れて、様々な具体的事例に沿って、一面的でない現実の国際関係を俯瞰した。

まず2010年が日米安保改定や日韓併合、エルトゥール号遭難事件以来の日土関係における節目の年であることを確認し、安保だけに注目されがちな日米安保条約における「相互協力」の内容や併合以来の100年ではきかない長い日韓関係について理解を深めた。

次にトピックとして皇室外交が取り上げられ、いかに両陛下や皇族の方々が多くの国々を訪問されているのか、あるいはアジア系の移民が多いカナダでも、両陛下訪問には好意的な見方が多いという事実、また海外メディアがいかに皇室の訪問を歓迎しているかといった具体的事象について、情報誌記事などを媒体として確認した。長い伝統を持つ日本の皇室は一種のソフトパワーであるという鈴木先生の言、ある議員が海外に出て「日本人として皇室に守られている」ということを感じたというエピソードには、深く考えさせられるものがあった。

分科会の後半は、参加者を二つに分けてのディベートに充てられた。具体的事例によって知見を深めようと試みられた流れに沿い、このディベートでは更にミクロな視点が与えられ、国内問題に見られる国際問題、すなわち異文化理解に関する問題を扱った。具体的には米国アリゾナ州における移民対策法に関する問題を扱った。

ディベート自体は、治安維持と財政政策としての側面を理由として主張する賛成派に対し、人種差別や財政効果に対する疑問といった直接の反論に加えて、事後規制における信義則の問題や連邦に対する州の権限の問題といった法的議論も含んだ反論を反対派が行い、それに賛成派が応酬するという形で進んだ。必ずしも個人の意見として純粋に賛成派と反対派に綺麗に分かれて議論をしたわけではなく、私も含め自身の意見とは逆の立場として主張をしなければならぬ人も複数いたことから、相互理解の問題において重要なのが、

ただ議論を深めることではなく、如何に相手に対する理解を深め議論を行うかという点にあるのではないかということが強く感じられた。

以上を通して、一般よりも普段意識的に国際関係について勉強しているように思っているが、机上の話だけになって実際の話について脆い部分が多くなっていることが実感された。理論のための理論を顕微鏡で以て勉強するような状況とならないよう、常に現実の問題に触れて考察を深める必要がある、というのが当分科会に参加して得た反省である。

●1740～

夕食：講師と参加者が語り合いながら、席に別れて食事。

●1900～

◇分科会2-1「